

市丸利之助海軍中將

「米國大統領への手紙」

教育問題プロジェクトチーム

廣瀬 誠 陸自73

はじめに

平成18年、防衛大学校第50回卒業式において、東京大学名誉教授 平川祐弘氏が、祝辞を述べています。その中で、旧軍関係で、立派な人として、陸軍の今村均大将とともに、硫黄島における激戦の最後にあたりアメリカ大統領ルーズベルトに宛てて手紙を書いた海軍の市丸少将（階級は当時のもとと、以下、少将の呼称を用いる）をあげています。歌人でもあった少将の歌

「紺青の駿河の海に聳えたる

紫匂ふ冬晴れの富士」

を引き、卒業生に、「小原台から眺めた富士山を末永く心にとめ、裾野の広い、大らかな人格を築いてください」と卒業生を激励されました。

今回は、その市丸海軍少将と「ルーズベルトへの手紙」についてのお話です。

1 「手紙」が書かれた状況とその発見

市丸利之助少将は、昭和19年8月に、第27航空戦隊司令官として、硫黄島に着任しました。硫黄島は、東京から1200 km離れた、東西8 km南北4 kmの小島です。この島が敵の手に落ちれば、東京を始め東日本の要域爆撃において、その護衛の戦闘機も随伴可能な距離となるとともに、不時着等の事態に必要な島でした。そのような重要な硫黄島はわが海空戦力の支援が出来ない状況下で、小笠原兵団が独力で守らざるを得ない状況でした。硫黄島守備隊指揮官は、栗林忠道中將です。（栗林中將と守備隊の戦いについては、本誌平成29年4月号の『先人の足跡』をご覧ください）

昭和20年2月19日の米軍上陸以来、圧倒的物量を誇る米軍の激烈な火力の

下、敢闘を続けた守備隊でしたが、3月16日に至り、栗林中將は、17日の総攻撃を決意し、その旨大本営に打電しました。これを受け、市丸司令官は、海軍司令部の壕内で訓示を行いました。その際、市丸少将は、訓示の中で「ルーズベルトへの手紙」を朗読しています。しかし、あくまで敵に出血を強要するため、栗林中將は、総攻撃を延期します。最後の突撃は26日早朝に実施されました。

「ルーズベルトへの手紙」は、日本文と英文の2通が準備され、最後の突撃部隊に参加していた海軍の村上治重通信参謀が腹に巻いて出撃したと伝えられており、実際に和文と英文とも第二飛行場付近の日本兵の遺体から米軍により発見されたといわれています。

「ルーズベルトへの手紙」の発見は、従軍記者により、4月4日、米本国に打電され、米国で報道もされています。その手紙は、現在もアナポリスのアメリカ海軍士官学校に保管されているということです。

最後の突撃の直前という時に、市丸少将は、アメリカの大統領にあてて書簡(Notte)をしたためたのです。その内容はどのようなものだったのでしょうか。

2 「手紙」の内容

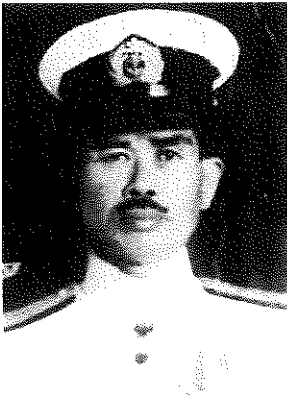
手紙は、英文と和文の2通が書かれていることは、既述の通りです。全文をお読みいただくことが必要と考え、以下に日本語を掲げます。(原文は、カタカナ交じりの歴史的仮名遣いですが、カタカナをひらがなにし現代仮名遣いに直しました。ただし、引用されている御製では、そのままとしました。段落の番号は、筆者が便宜上付したものです)

ルーズベルトに与うる書

① 「日本海軍市丸海軍少将書を『フランクリン ルーズベルト』君に致す。我今我が戦いを終るに当たり一言貴下に告ぐる所あらんとす

② 日本が『ペルリー』提督の下田入港を機とし広く世界と国交を結ぶに至りしより約百年此の間日本は国歩艱難を極め自ら欲せざるに拘らず、日清、日露、第一次欧州大戦、満州事変、支那事変を経て不幸貴国と干戈を交うるに至れり。之を以て日本を目的するに或は好戦国民を以てし或は黄禍を以て讒誣(そとごころ)し或は以て軍閥の専断となす。思わざるの甚きものと言わざるべからず

③ 貴下は真珠湾の不意打を以て対日戦争唯一宣伝材料となすと雖も日本をして其の自滅より免る、ため此の挙に



市丸利之助(ウイキペディアより)

出づる外なき窮境に迄追い詰めたる諸種の情勢は貴下の最もよく熟知しある所と思考す

④ 畏くも日本天皇は皇祖皇宗建国の大詔(注2)に明なる如く養正(正義)重暉(明智)積慶(仁慈)を三綱とする八紘一字の文字により表現せらる、皇謨(注3)に基き地球上のあらゆる人類は其の分に従い其の郷土に於てその生を享有せしめ以て恒久的世界平和の確立を唯一念願とせらるゝに外ならず、之曾ては

四方の海皆はらからと思ふ世に
など波風の立ちさわぐらむ

なる明治天皇の御製(日露戦争中御製)は貴下の叔父「テオドル・ルーズベルト」閣下の感嘆を惹きたる所にして貴下も亦熟知の事実なるべし

⑤ 我等日本人は各階級あり各種の職業に従事すと雖も畢竟其の職業を通じての皇謨即ち天業を翼賛せんとするに外ならず 我等軍人亦干戈を以て天業恢弘(注4)を奉承するに外ならず

我等今物量を得るる貴下空軍の爆撃及び艦砲射撃の下方形的には退嬰の已むなきに至れるも精神的には弥豊富にして心地益明朗を覚え歡喜を禁する能わざるものあり。之天業翼賛の信念に燃ゆる日本臣民の共通の心理なるも貴

下及「チャーチル」君等の理解に苦しむところならん。今茲に卿等の精神的貧弱を憐み以下一言以て少く諷ゆる所あらんとす

⑥ 卿等のなす所を以て見れば白人殊に「アングロ・サクソン」を以て世界の利益を壟断(注5)せんとし有色人種を以て其の野望の前に奴隷化せんとするに外ならず。之が為好策を以て有色人種を瞞着(注6)し、所謂悪意の善政を以て彼らを喪心無力化せしめんとす。近世に至り日本が卿等の野望に抗し有色人種殊に東洋民族をして卿等の束縛より解放せんと試みるや卿等は毫も日本の真意を理解せんと努むることなく只管卿等の為の有害なる存在となし曾ての友邦を目するに仇敵野蠻人を以てし公々然として日本人種の絶滅を呼号するに至る。之豈神意に叶うものならんや

大東亜戦争に依り所謂大東亜共栄圏の成るや所在各民族は我が善政を謳歌し卿等が今之を破壊することなくんば全世界に亘る恒久的平和の招来決して遠きに非ず

卿等は既に充分なる繁榮にも満足することなく数百年來の卿等の搾取より免れんとする是等憐むべき人類の希望の芽を何が故に嫩葉(注7)に於て摘み取らんとするや。只東洋の物を東洋に帰すに過ぎざるに非ずや。卿等何すれ

ぞ斯くの如く貪欲にして且つ狹量なる。⑦ 大東亜共栄圏の存在は毫も卿等の存在を脅威せず却つて世界平和の一翼として世界人類の安寧幸福を保障するものにして日本天皇の真意全く此の外に出づるなきを理解するの雅量あらんことを希望して止まざるものなり。

⑧ 翻つて欧州の事情を観察するも又相互無理解に基く人類闘争の如何に悲惨なるかを痛嘆せざるを得ず。今「ヒットラー」總統の行動の是非を云為(注8)するを慎むも彼の第二次欧州大戦開戦の原因が第1次大戦終結に際しその開戦の責任の一切を敗戦国独逸に帰しその正当なる存在を極度に圧迫せんとしたる卿等先輩の処置に対する反撥に外ならざりしを看過せざるを要す。

⑨ 卿等の善戦により克く「ヒットラー」總統を仆すを得るとするも如何にして「スターリン」を首領とす「ソビエトロシア」と協調せんとするや。凡そ世界を以て強者の独専となさんとせば永久に闘争を繰り返し遂に世界人類に安寧幸福の日なからん。

卿等今世界制覇の野望一応將に成らんとす。卿等の得意思うべし。然れども君が先輩「ウイルソン」大統領は其の得意の絶頂に於て失脚せり。願くば本職言外の意を汲んで其の轍を踏む勿れ。

市丸海軍少將 (原文は、平川祐弘著「米國大統領への手紙 市丸利之助伝」出門堂 より)

先ずは、そのまま読んでいただきましたが、若い読者はどのように感じるでしょうか。

内容は、この戦争に対する日本から見た意義を説明し、こちらから見れば、英米等の行っていることはアジアへの侵略と収奪であつて、その自主独立を何故に阻むのかという非難であり、連合国側の戦略的同盟関係に対する矛盾の指摘です。市丸少將は、なぜ、この手紙を書いたのでしょうか。

戦争を戦っている一作戦部隊の指揮官が、交戦相手國の大統領にこのような書簡を送ることは、前代未聞、異例中の異例のことでしょう。その意義は、この壮絶な戦いを戦つた部下を含む、大東亜戦争に対する日本国民のやむにやまれぬ思い、日本側からの正義を、日米がこの戦争に至る経緯の一方の当事者である大統領に直接伝えるということではないかと思ひます。この手紙の内容について、私達は改めてじっくりと考えてみる必要があるのではないのでしょうか。以下、若い皆さんが考える上で、注目してほしい点について、述べてみたいと思ひます。

市丸海軍少將 (原文は、平川祐弘著「米國大統領への手紙 市丸利之助伝」出門堂 より)

第一は、部下に対する訓示の中で朗読されたという点です。

最後の戦いを前に生死の関頭に立つ部下に、わが国がそのために戦つてきた正義について、改めて語ることが必要と感じたのではないでしょうか。その正義を、敵国の大統領に対して、堂々と闡明するという決意を示したと思われ

ます。また、そこには、自ら正しいと信じる者が敗れるという悲劇を受け止めるという姿、覚悟が見えるように思われます。

第二は、この戦争に至る米国の対日政策への反省を促している点です。

②において、わが国が、ペリー提督の来航以来、西方東漸の波に抗して独立を成し遂げるため、近代化を進め「自ら欲せざるに拘らず」、日清・日露戦争に始まる戦いを続けて、大東亜戦争に至った経緯を述べています。

③においては、大東亜戦争に至るまでの米国の対日政策が、わが国を追い込んだことを非難し、その間、その当事者であったルーズベルト大統領は、そのことが、一番よくわかっているはずであると書いています。

米国と日本の確執は、遠くは日露戦争直後の満鉄経営に関する事案以来のことですが、日本側から長中期的にこれを見れば、

a 日本人移民を制限されたこと

b パリ講和会議における人種的差別撤廃提案を、イギリス等の反対もあり議長であったウィルソン大統領が全会一致事項とすることにより否決されたこと

c 中国の門戸開放と機会均等を一貫して掲げ、満洲事変に国際連盟のメンバーでないにも拘わらず干渉したこと
d シナ事変において蒋介石政権を支援したこと等

の経緯があります。
短期的な経緯として、米国は

a ルーズベルト政権下、ドイツの脅威に対し早くから英米間で首脳と幕僚レベルの緊密な連携がなされ、米国内に中立法がありながら英国に対独戦争のための物資の支援を行い、

b ドイツがアメリカの挑発に乗らな

いとみるや、日本に対し、一方で二人の神父を通じた日本との交渉を引き延ばしつつ近衛首相の提示した首脳会談も受け入れないまま、わが国として到底受け入れられない内容のハル・ノート

を11月25日に手交して、日本を戦争決断のやむなきに追い込み、
c 解説された日本側の暗号によって日本側の奇襲攻撃が予想されたにも拘わらず、真珠湾所在の米軍部隊には緊急の警告も出さなかった等

という見方があります。

上記の短期的な見方は、敢えてわが国であまり言及されない方面に焦点を当てて見ました。これらは、従来、アメリカでも歴史修正主義とされ、広く取り上げられなかった見解ですが、実際に第2次大戦終結直後から、チャールズ・ビーアド博士等により指摘されている論点です。市丸少将が、この時点で、特に短期的な経緯についてどこまで押さえていたかは判りませんが、少なくとも、少なからぬ知見を持つていただろうことに驚かされます。

さらに、⑥において、アジアから見た近代における欧米諸国のアジア侵略の歴史を語り、アジアの独立を許さぬその狭量を責めています。

以上のような見方に対して、戦後の教育を受けた若い人たちは、違和感を感じるかも知れません。しかし、歴史を見る場合、すべてが事後的にわかっている現在の地点に立って、過去を一

方的に判断するのは、公正な見方とは言えないでしょう。私たちの父祖が、明治維新の地点に立って、わが国として富国強兵策をとり、日清・日露両戦

役の勝利を経て不平等条約を解消し、西欧諸国と対等の独立国家として立ち、近代化とアジア主義と自由主義等の大きな流れの中で、わが国の伝統的な生き方を模索しつつ国益を追求し

て、その延長線上に大東亜戦争を戦わ

ざるを得なかったという見方は、現在の時点から過去を見ている戦後の日本では、一般に受け入れられて来なかったように思います。私達は、自分達の父祖が歩んだ道の、その地点に自らを置きその苦悩と決断を偲ぶという、いわば、父祖の歩んだ歩みを辿り、思い出してみることが必要ではないかと思えます。そうすることにより、本当の意味で、過去を反省することも出来るのではないのでしょうか。

国家間の競争、特に戦争を振り返るとき、勝利した方がすなわち善であり敗北した方が悪であるという見方ではなく、成功したか、失敗したかという視点でみるのが適切なのでしょう。当事者は、おのおのその国益のために死力を尽くして戦ったのです。そして、結果としていずれかの当事者は、敗北することになります。戦争を振り返る場合、なぜ戦争に至ったのか、失敗したのは何故なのかを反省すべきなのでしょう。そのためには、歴史の見方は

その見る立ち位置によって変わるので多角的に見ることは勿論重要ですが、日本人としての自らの立ち位置から見

つめ直す事も、同様に大切だと思います。それがあつてはじめて、日米両国が、それぞれの国益のため外交交渉とその後

理解でき、そして、わが国の戦争指導や戦争遂行要領の反省と教訓が導かれるのではないのでしょうか。戦争は避けなければならないことは、議論の余地なく万人共通の認識でしょう。しかし、大東亜戦争のような国家の大事業が破れた、その結果として、ただ、「戦争は悪である」という「反省」だけではあまりにも寂しく、また勿体ないのではないかということ、また「手紙」は私達に教えてくれているのではないのでしょうか。

このように考えれば、私達の父祖達が、明治以来進めてきた近代化のやり方が間違っていたのか、もし、そのような選択肢があるとすれば、どのような選択肢をどの時点で採用すれば良かったのか、そしてその選択肢を採った結果は、どのようなものになったのだらうか、等の疑問がわいてくるはず

です。歴史に自ら身を置いて、我がこととして具体的に「反省」をしなければ、将来への真の教訓は得られないのではないのでしょうか。

第三に、日本の理想のために最後まで戦う日本人の決意を述べている点です。

⑤には、厳しい情勢下でも日本人の敢闘精神が盛んである事を述べていますが、この後の米軍の侵攻が想像を絶する抵抗に遭うことを予想させます。

日本が講和を目指す場合の布石を打つたと考えることができるでしょう。

第四は、連合国側の同盟関係の矛盾を指摘し、将来において、このことが問題化することを暗示している点です。

⑨で、自由主義の英米と共産主義のソ連が組んでいることの問題を鋭く指摘し、その協調の難しさと今後の新たな闘争の可能性を示唆しています。大戦終了後、冷戦がともに第2次大戦の勝者である英米陣営と中ソの陣営で戦われたことはよく知られています。その先見性は、特筆すべきと考えます。

第五に、戦後処理を誤らないように忠告している点です。

⑧で、第1次大戦後の失敗を引き合いに出していますが、大東亜戦争終了後の米国の対日戦後政策を考えてのことではないかと思われれます。その深慮に驚かされます。

注1 他人を陥れるため、事実を曲げ悪く言うこと（広辞苑より）

注2 詔（みことり）の尊敬語（同前）

注3 天皇の国家統治のはかりごと（同前）

注4 帝王の事業等を大きくしておしひろめること（同前）

注5 うまく利益を独占すること（同前）

注6 あざむくこと。こまかすこと（同前）

注7 若業に同じ

注8 言うことやすること。言行（同前）

おわりに

市丸利之助少将は、明治24年、現在の唐津市柏崎に生まれました。明治43年、唐津中学校を卒業すると海軍兵学校に進みます。パイロットの道を選びますが、大正15年、霞ヶ浦航空隊で飛行訓練中、操縦索が切断して墜落しました。瀕死の重傷を負い、命は助かったものの、大手術を繰り返すことになりました。何とか回復しましたが、後遺症が残り、歩行も困難となりました。その後再び悪化し、昭和2年に再手術を受けています。辞職を覚悟するほどの怪我でしたが、この長期療養中に、短歌をはじめ漢詩、書等も学んでおり、この間の苦勞は、少将の人格形成に大きな力となったと思われれます。（少将の写真で、眉間にしわの寄った厳しい表情に見えるのは、この事故の傷によるものです）

その後、予科練の初代部長として教育を担うことになったとき、練習生に

第一に人間たるの資格を失う勿れ

第二に帝国海軍軍人たる資格を自覚せよ

第三に各自の自覚を涵養すべし

と訓示したと言います。人として真の「個」の強さを求めたもので、パランスの良さが感じられます。不平を何一つ言わぬ人だったと言われれますが、穏やかな家庭人・一般人として伝えら

れる姿、飛行機のなくなった航空戦隊司令官として最後まで戦い抜いた果敢な指揮官としての姿、そして、「ルーズベルトへの手紙」を残した少将の姿に、何者にも屈せぬ信念の人、独立不羈の武士の風貌を見る思いです。

歴史認識が大切なのは、現代に生きる私達の言行に強く影響を与えるからだと考えます。それは、現代の問題と直結しているのです。本稿が、若い方々にとつて、先入観にとらわれずわが国の歴史、特に大東亜戦争に至る歴史について改めて考える一助となれば、筆者として望外の喜びです。

【主要参考文献】

1 『米国大統領への手紙 市丸利之助伝』 平川祐弘 出門堂

市丸利之助中將について、さらにお知りになりたい方には是非おすすめします。本稿も多くを本書によっています。

2 『近代戦争史概説』 陸戦学会

3 『大東亜戦争全史』 服部卓四郎 原書房

4 『硫黄島 栗林中將の最期』 梯久美子 文春文庫

5 『The Rising Sun』 John Toland The Modern Library, New York

6 『Back Door to War』 The Roosevelt Foreign Policy Charles C. Tansill, Osara Publications